

万葉名歌

土屋文明著



著者略歴

土屋文明 (つちや ぶんめい)

1890年 群馬県に生る

1916年 東大哲学科卒業

《現在》 アララギ会員，文芸家協会会員，芸術院会員

《著書》 「山谷集」「菫菁集」「万葉紀行」「万葉集私注」「万葉集の話」「歌集・自流泉」

《現住所》 東京都港区南青山3の8の18

〈お願い〉

☆ご愛読ありがとうございました。小社ではみなさまの声を参考に、より良い本を作るよう努力しておりますので、本書の読後感をお聞かせくだされば幸いです。また内容や造本についても、お気づきの点がありましたらご指摘ください。

☆現代教養文庫の定価は、すべてカバーに明記してあります。

☆万一、落丁乱丁の場合は、直接小社にお送りくだされば早速お取替します。

☆本書巻末に記載の広告中、定価に変更がある場合もありますので、あらかじめご了承ください。

現代教養文庫 141

万葉名歌

© 1956

昭和 31 年 8 月 30 日 初版第 1 刷発行

昭和 51 年 4 月 30 日 初版第 50 刷発行

著 者 土 屋 文 明

発 行 者 小 森 田 一 記



発行所 株式会社 社会思想社

(113) 東京都文京区本郷 1-25-21

電話代表 (03) 813-8101

振替 東京 6-7 1812

0192-10141-3033

双文社印刷・小林製本

現代教養文庫

141

万葉名歌

土屋文明著

社会思想社

序

この本は、前に「万葉集小径」という名で、発行したものをもととした。万葉集の中の代表的な歌を三百余首とり出して、主にその作品としての味わいを解きあらわそうとしたものである。万葉集四千五百余首の作品は、もちろんどれもそれぞれに面白いものであるので、簡単にその中から代表的な作品を数百首選び出すということはやさしいようで、決してやさしい仕事ではないと思う。古いところでも新しいところでも、いろいろそうした書物が出ておるが、選ぶ人々によって、選び出される作品が、必ずしも一致しないのはそのためである。この本の選出は、作品の感銘、文学的の価値というものを第一とした。したがって、その他の意味で有名になっている歌でも、はいらないものもあるわけである。

この本でやったように、万葉集の巻々の抜粋でなしに、全体を通じて年代順に並べたことは、単に文学史的の興味ばかりでなしに、もっと広いこの時代の精神史に何か役立つのではないかと思われる。第一このやり方で万葉集の作者がお互に影響し合いながら成長していった筋道の、ごくあらましは、分るのではないかと思う。

前の「万葉集小径」は、古い発行なので、この版では、その後発行した「万葉集私注」をもととして読み方や解釈にも相当改訂をしたところがある。それでもなお、広く行われている学説や考え方と違っている点も少くないと思う。そういうことについての説明は、この本ではあまり立

ち入らないことにしてあるが、なお、この本の考え方の根拠を必要とする読者には、右の「万葉集私注」がいくらか役立つだろうと思う。

万葉集についての説明は、本文の方に記したとおりであるが、古い、新しいという時代をこえて、万葉集がわれわれ日本人に訴える力を持っているのは、事実というほかない。おそらくこのつながりは、日本語というものが続く限りは、続くに違いない。ただ万葉集はどこまでも歌集なのであるから、一つ一つの作品の感銘を離れては、どんな行きとどいた議論でも、万葉集を伝えることはできない。この本の取り上げた作品の数は、必ずしも多いとはいえないけれども、その一首一首が必ず理論を越えたところで、読者とこのすぐれた日本民族の遺産とを結びつけるのに足りるものだと思ふ。

昭和三十一年八月

土 屋 文 明

目次

目次

序	三
万葉集理解のために	七
一 万葉集とはどんな書物か	九
二 万葉の時代	三
三 万葉の作者	四
四 万葉集の何が現代につながるか	二
五 注 釈 書	四
万葉 名 歌	七
所載歌索引	二

万葉集理解のために

一 万葉集とはどんな書物か

万葉集は、現在伝わっているわが国の歌集の中で、一番古い歌集である。読み方は、マンヨウシュウでも、マンニョウシュウでもよく、両方行われている。万葉集と名づけた意味は、はつきり分らない。万のことばを集めたものという意味であろうと、古くからいわれていたが、近ごろは、「葉」は「ことば」ではなく「時代」の意味であろうという説が有力になり、万世の歌を集めたもの、もしくは万世に伝えるべき歌を集めたものというのであろうとも考えられている。

しかし、この時代の中国の書物に、何々「詞林」とか「字林」とかいう名をつけたものがあり、日本にも万葉集よりも前に、今は伝わらないが、山上憶良やまのうえのおくらの作った「類聚歌林るいじゅかりん」という歌集のあったことが知られている。いずれも、物をたくさん集めたものという意味に「林」という字を使って書名にしているから、「万葉」は「歌林万葉」で、歌の林の木の子葉にもたとえべき多くの歌を集めた書物という意味であろうと思われる。

万葉集は、二十巻から成り、約四千五百首の歌を集めている。その大部分は、もちろん、五七五七七の普通の短歌である。その他、五七五七七……と続いて最後が五七七で終る長歌や、五七七五七七の旋頭歌せどうかなどもあるが、短歌に比べると、はるかに数が少い。

そして、それらの歌を、幾つかの部類を立てて分類したり、年代順を考えたりして、編集している。しかし、その編集のやり方は、全部の巻を一つの方針でおし通したものではなかったと見

えて、巻々によつていろいろである。部類の立て方も、雑歌、相聞、挽歌、譬喻歌、春夏秋冬の四季によるもの、その他いろいろであつて、巻によつて一定していないのであるが、部類立ての根本になつてゐるのは、雑歌、相聞、挽歌の三つであつたように見える。相聞は、広く人と人とのやりとりであるが、実際には恋愛の歌が主になつてゐる。挽歌はもと中国で柩をひく時にうたう歌をいうのであるが、万葉集では一般に人の死を悲しんだ歌が集められてゐる。雑歌は相聞歌、挽歌以外の歌であつて、むしろ歌としては一番本格的なものが、集められてゐる。

編集は誰がいつしたのかというと、これもはつきりしたことは分らない。撰者すなわち編集者には、幾人かの候補者があげられてゐるけれども、その中では、万葉集の末期の作者である大伴家持が古くから一番有力である。しかし、確かに家持だという積極的な証拠は、もちろん一つもない。ただ内容から見ると、大伴家関係の記事がとりわけ詳しいことや、家持の手記か、少くともその手記を唯一の資料にしたと見える巻が幾つかあることや、家持の歌は他の作者に比べてとびぬけてたくさんあり、家持の天平宝字三年（七五九）の作を最後にして万葉集が終つてゐることなど、いろいろの点から、編集者としてふさわしい条件を具えた個人を考えると、やはり大伴家持が一番有力になるのである。

万葉集は、日本の文字すなわち仮名が發明される前の編集なので、すべて中国の文字すなわち漢字で記されている。この時代の書きことばは、漢文で書くのが普通であつたから、万葉集でも、歌以外の記事は漢文である。しかし歌は、もちろん日本語の歌であるから、漢文ですますわけにいかない。そこで、漢字を、表意文字としてそのまま使つたり、あるいは表音文字に代用したり

して、いろいろ苦心しながら、日本語を書き表わしている。しかも、そのやり方は、今日から見るとひどくまちまちで統一がなく、一定のきまりを見出すことは、ほとんどできがたいくらいである。例えば、「我」の字が、表意文字としてワ、ワレ、ア、アレ、ワガ、アガにも用いられるし表音文字として助詞のガにも用いられるという具合である。それらの用い方を幾つかに分類することはできないわけではないが、一々の場合になると、そのどれをあてはめてよいのか、簡単に決められないことが多い。この複雑で統一のない表記法が、万葉集の歌の読みにくい、一番大きな原因になっている。従って、一つ歌を読むにも、それをどういう日本語として読んだらよいのか、いろいろ問題が起るのであり、一首の歌にいろいろな読み方が考えられることにもなるのである。今日では、昔からの多くの学者、ことに江戸時代の元祿ごろから今日に至る多くの学者の研究によつて、だいたいは読み解かれてはいるけれども、まだ読み方のはっきりしないものも、相当残っている。

万葉集には、万葉集よりも前にあつた歌集で、今はほろびてしまったものが、幾つか引用されている。前にあげた山上憶良の編集した「類聚歌林」もそうであるが、その他に、「柿本人麿かきのものひとまろ歌集」「笠金村歌集かさのかなむら」「高橋虫麿歌集たかはしのむしまろ」「田辺福麿歌集たなべのさきまろ」「古歌集」などの名が見えている。どういふ歌集であつたかは、現在見ることでできないから、もちろん分らない。ただ、万葉集に引用されて残っている歌や記事によつて、そのおおよそが想像されるだけである。

二 万葉の時代

万葉集に載っている歌は、時代の分っているものではなく、古いところは仁徳天皇（三一三——三三九）の時代から、新しいところは淳仁天皇の天平宝字三年（七五九）まで、その間およそ四百五十年にわたっている。

しかし、古い時代の歌は、はたしてその時代のものかどうか、疑問もあるし、また数もきわめて少い。実質的には、舒明天皇（六二九——六四一）の時代以後の百二三十年間の作品と見てよいのであろう。作者のわからない、従って時代も分らない、いわゆる民謡は、万葉集の過半数に及ぶ数を占めているのであるが、その民謡も、大体は以上と同じ時代に行われたものと見て、たいてい間違いはないようである。

万葉集の時代が、実質的には舒明天皇時代以後のものであるというのは、単に歌の数が急にそのころから多くなることばかりではない。それ以前の古い歌が、本質的には、前代の記紀歌謡時代のものと変わりが無いのに比べて、ほんとうの意味で作者のある歌、いいかえれば、個人としての意識にはつきり目覚めた歌が作られるようになってゐる。この新しい歌風こそは、前代の記紀歌謡とは著しく違ひ、万葉集の新しい歌風といつてよいだろう。つまり、ほんとうに万葉集の歌らしい万葉集の歌は、だいたい舒明天皇時代から始まるといえよう。そういう点からも、万葉集の実質的な時代を以上のように見る事ができるように思われる。

このように万葉集の新しい歌が、この時代に始まったということは、もちろん、当時の日本の世の中のありさまと、無関係には考え得られない。いうまでもなく、このころの日本は、天皇を中心とした新しい国家の建設を目ざして、いろいろな新しい文化的な大事業を、とりわけ天智天皇のいわゆる大化の改新を通して、急速に押し進めた時代である。従って、そうした文化的な事業に直接参加した、あるいはその恩恵をこおむった人々の生活が、一段と明るく、生き生きとしたものになったことは容易に想像できよう。万葉集の初期の、自我に目覚めた新しい歌は、そういう人々によって作られている。やがて新しい国家の統一は完成され、「咲く花のほふがごとき」奈良の都の盛りを見るのであるが、同時にそれに伴ういろいろの矛盾も、ないわけではなかった。そうして、それは、万葉集の終りに近づくにつれて、世の中のいろいろの面に、だんだん著しくあらわれてくるのであるが、それがやはり万葉集に反映しているのである。

三 万葉の作者

万葉集には、非常にたくさんの方が登場する。しかし、それらの人々は、今日いうような専門歌人ではなく、何かの機会に自分の生活を歌であらわさずにはいられなくなって、作ったというようなのが、普通であつたから、ただの一首、またはせいぜい二三首の作者が、一番多いのである。

さらに万葉集の過半数を占める歌は、作者のわからない、いわゆる民謡であるが、この民謡は単にある個人が作つてその名がわからなくなったというようなものでなくて、集団なり社会なり民族なりに共通した意識や感情が、いろいろの手續を経て、現在見るような歌の形にあらわされたものである。従つて、しいて作者を求めれば、名前の忘れられた一個人ではなく、その歌の行われている集団なり、社会なりの感情であり、さらにいえば、そうした一つ心に結ばれている一般民衆であるといわなければならないであらう。

そうなると、数人のすぐれた歌人だけで万葉集を代表させるということとは、もともと無理なことであり、またそこに万葉集の特質があるということにもなるのである。しかし、他の一面ではこれら多くの作者が、皆一様に同じ力ではたらいっているわけではない。万葉集の著しい歌風の創造には、すぐれた一人の作者の力がはたらいっているところもあるものであり、そういう意味で、幾人かの代表的歌人はあり得るであらうから、それらの作者を無視することも、もちろんできない。

わけである。

また万葉集の作者は、多種多様で範囲が広く、上は天皇から下は乞食に至るまで、当時の社会のいろいろな方面に及んでいる。しかし、名の分っている作者の多くは、当時の上流階級、支配階級と見てよい。一般民衆のものは、東国の農民出身の防人やその妻の歌のように、特別の事情で名前の分っているものもないわけではないが、大部分は作者のわからない民謡となって伝えられている。また男女の割合については、大体は似たようなもので、後世の次々の時代よりも、はるかに女の活躍した時代ともいえよう。ただ女の作者には、特にすぐれたものは、少いようである。万葉集の作者については、大体以上のようなことがいえよう。ただ、幾人かのすぐれた作者、いわゆる代表的歌人については、本文の中で必要に応じて解説したつもりであるが、今便宜上とりまとめると、おおよそ次のごとくであろう。

かきものひとまろ

柿本人麿

人麿は、後の世から歌聖とあがめられたのはもとより、既に万葉集の時代に伝説的な存在になっていたと考えられるほど、有名であり、また実際にも、とびぬけてすぐれた数々の作品を残したのであるが、その経歴については、万葉集以外に直接手がかりとなるような資料を求めることができない。すぐれた歌を作ったがために、その偉大な名を今日にまで残したにすぎないのである。生国は、近江おうみとも石見いづみともいわれるが、大和やまとの国と見るのが一番実際に近いようである。身分の低い官吏として、持統じとう・文武両朝もんぶに仕えたのであるが、晩年に及んで、石見の国に赴任し、時に上京することはあっても、そこで没したものであると思われる。没年は、もちろんは